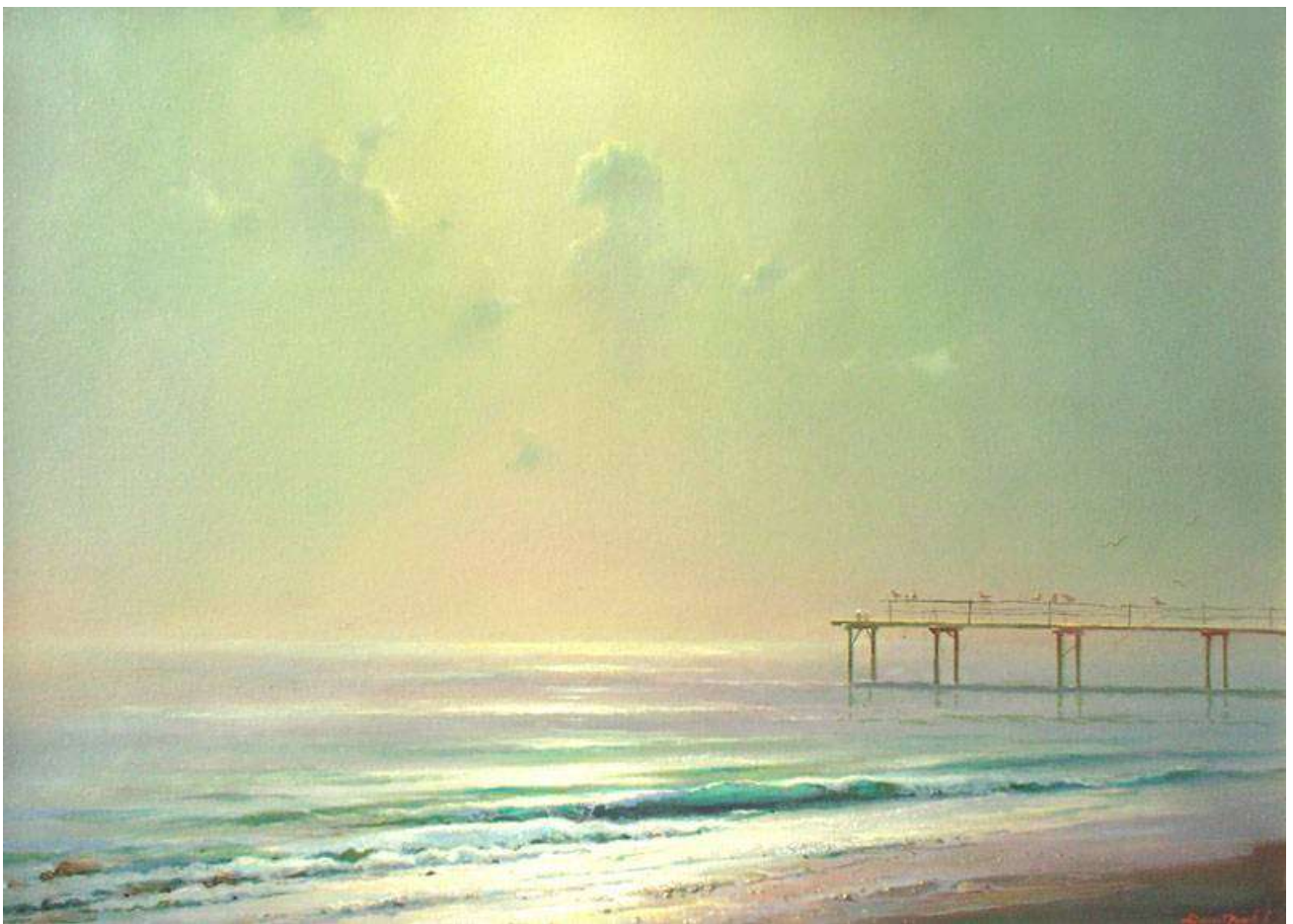

発達理論の学び舎

Back Number: Vol 253

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」



目次

- 5041. 【日本滞在記】体現されたくつろぎと美意識の深化
- 5042. 【日本滞在記】永遠への道と魂の輝き
- 5043. 【日本滞在記】山口県滞在最後の朝に
- 5044. 【日本滞在記】今朝方の夢
- 5045. 【日本滞在記】実家を出発する日：今朝方の夢
- 5046. 【日本滞在記】先輩との偶然の再会：寄せては返す波と人生
- 5047. 【日本滞在記】成田に向かう車中で思うこと
- 5048. 【日本滞在記】収縮拡散運動の真っ只中で：本当の作曲家
- 5049. 【日本滞在記】日本出発の朝の心境：今朝方の夢
- 5050. 【日本滞在記】搭乗前の心境
- 5051. 【日本滞在記】流れ星が夜空と出会う感覚の中で
- 5052. 【日本滞在記】変容を確認させてくれた3週間の日本滞在
- 5053. 【日本滞在記】ヘルシンキ上空での閃き：来年の秋は札幌・函館・金沢へ
- 5054. 世界の適当さを歓迎して
- 5055. 魂の始動
- 5056. 魂の安息地としてのフローニンゲン：今朝方の夢
- 5057. 生の歓喜：魂が天に帰る夢
- 5058. 光の絵筆
- 5059. 闇の深さと味わい深さ
- 5060. 優しい居住空間と食育：船舶での旅に思いを馳せて

時刻は午後7時を迎えた。つい先ほど、夕食後の一杯の抹茶をいただいた。父が夕食後に入れてくれる抹茶は実に味わい深い。今回の実家に滞在中には2種類の抹茶を飲んだが、ここ数日間飲んでいるものは、一保堂の「幾世の昔(いくよのむかし)」というお茶である。このお茶は、口当たりがまろやかであり、甘味のある味がする。家族三人で抹茶をゆっくりと味わい、幸せなひとときを過ごした。

今回実家に戻ってきて、これまで以上にゆとりのある時間を過ごせたように思う。あえて何も考えないような余白の時間が自然と生み出されており、私のそうした時間の中にいることが多かった。こうしたゆとりのある余白的時間の中から創造性や集中力が溢れてくる。日本で得られたこのくつろぎの感覚を、オランダの平穏さの中で濾過し、純化させていく。自己がくつろぎに変貌するまでそれを続けていこう。もうそうした自己の背中が見え始めている。

くつろぎの中にとろけ出し、くつろぎと一体化した自己。そのような自己が誕生したとき、ようやく自分の創造性が鮮明に発露されるだろう。

先ほど、実家の食器棚にある数々の陶器や磁器を改めて眺めた。これまでの私は、絵画や音楽に関心はあれど、こうした焼き物関係にはあまり関心を持っていなかったように思う。しかし、先ほど食器棚に置かれている焼き物に関心を示した自分を見るにつけ、自分の中の美意識にも変化が起こったのだと思う。

早いもので明後日には再びヨーロッパに戻るが、そこでの新たな生活においても、自分の美意識をより一層育んで行こう。美的感覚を磨けば磨くほど、この世界に絶えず存在している様々な美を認識することができる。しかも、単純に多様な美的存在を認識するにとどまらず、美的存在の深さも認識できるようになっていくだろう。来月にはヴェネツィアに旅行に出かけ、再来月の年末年始にはマルタ共和国に旅行に出かけていく。こうした旅行を通じて、自分の美意識はさらに磨かれ、さらに深まっていくだろう。深まる秋の風に吹かれながら、そのようなことを思う。今日も満月がいと美しい。山口県光市:2019/10/14(月)19:19

—高貴なる芸術作品の享受は祈りに喩えられる—ヴッケンローデル

何かに対して祈りを捧げたい気持ち。そんな気持ちが今の私を包んでいる。

気がつけば、実家での滞在も明日までとなり、明後日には成田空港近くのホテル日航成田に宿泊し、明々後日にはオランダに戻る。今回の一時帰国を振り返るのはまだ早いかもしれないが、今回の滞在はこれまでとは比べものにならないほどに充実していた。それは日本各地の美術館に訪れたり、各地の風土に触れたり、親友たちと旧交を温め、家族と共に幸せな時間を過ごしたことの総体としてもたらされたものだろう。

この3週間の全てに対して感謝の意を捧げ、祈りを捧げたい。究極的には、生がもたらす充実感と幸福感に対しては、もはや感謝の言葉を捧げることと祈りを捧げることしかないのだと思う。

充実感と幸福感という感覚的感情を根源にして、感謝と祈りが円環的に自分の内側に循環し、それが同心円を描くように自己から拡散放射される。ああ、これが永遠に向かっていく感覚なのだという気づき。なるほど、永遠への道は、こうした循環的かつ円環的なものだったのだ。それがもうありありと知覚される。

こうした知覚体験は、永遠の道の一端を知るよすがとなった。ものを知るというのは、そのものを認識の光によって明らかにすることであり、それに応じて自己の存在に光が当てられる。そう、それによって自己がより鮮明に明らかになることが、何らかの事物を知るということの本質にある。私たちが何かを本当に知るとき、それは事物そのものだけについて知ることになるのではなく、私たち自身を知ることになるのだ。ここに、知ることまつわる主客未分の特性を見て取ることができる。

気がつけば、今日は10曲ほど曲を作っていた。どれも詩や短歌のように短い。いや、俳句のように短いと言っていいかもしれない。だが、そうした長さに関係なく、そこには確かに自分らしさが滲み出ていることが興味深い。この一連の短い日記の中にも、言葉を通して自分らしさが滲み出ているに違いない。それは魂の固有の味や香りとして立ち現れ、魂の固有の輝きとして顕現される。魂の輝きを通じて、明日もまた作曲実践を行なっていこう。

音楽宇宙という無限なるものを、有限なる我を通じていかに具象化していくか。それを一つのテーマに持ち、永遠なる魂を通じて、魂の輝きを音や言葉にしていこう。

明日もまた暗く、そして明日もまた明るい。山口県光市:2019/10/14(月)19:51

5043.【日本滞在記】山口県滞在最後の朝に

時刻は午前5時を迎えようとしている。今私がいる山口県光市は、まだ闇に包まれていて、光の到来を待っている。

一日が活動に向けてゆっくりとした呼吸をしている。私たちが呼吸をするのと同じように、今日という日もまた呼吸をしているのだ。

今朝は4時過ぎに起床し、心身の状態はすこぶる良好である。実家に戻ってからも、しっかりとした料理を食べるのは夕食のみであり、朝と昼は基本的に果物がメインとなっているため、消化にエネルギーを充てる必要がなく、日中は十分な活動が行え、それでいて高い質の睡眠が確保されている。

午後10時以降に起きて何かしようと思っても、集中力も活動エネルギーも高くないのだから、オランダでの生活同様に速やかに就寝し、午前4時頃に目覚めるという生活が、今回の一時帰国の最初から最後まで続いたことを嬉しく思う。その恩恵を享受する形で、朝から晩まで十分な活動に従事することができた。今日もまたそのような一日になるだろう。

今日はこれから、いつもと同じように早朝の作曲実践を行う。これから父が海のチェックに行き、そこから帰ってきたら、いつものように野菜と果物をふんだんに使ったジュースを作ってくれるだろう。

今日は朝一番に父と一緒に警察署に行く。父は免許の更新を行い、私は来年に控えた免許の更新のために住所変更をしておく。警察署を訪れた後に、近くの大型スーパーに立ち寄り、今日の夕食用の食材を購入する。実家に滞在できるのは今日が最後のため、今夜の夕食は最後の晩餐となる。

オランダで生活をしているときには、牛・豚・鳥のみならず、魚も食べないのだが、実家に帰ってきてからは、魚だけは食べるようにしている。やはり山口県で入手できる魚は新鮮で実にうまい。事前に肉類は食べられないことを両親に伝えていたこともあり、今回の滞在中には肉料理を一切食べておらず、そのおかげで腸内環境が良好な状態を維持されているのだと思う。今夜の最後の晚餐を何にするかは悩ましいところだが、今夜もまた何かしらの魚を選び、それを父に料理してもらおうと思う。

瀬戸内海の静かな波音が聞こえてくる。その音に耳を傾け、音と一体となる。瞑想的な意識の中で音を聞くこと。瞑想が音楽となり、音楽が瞑想となる。山口県光市:2019/10/15(火)05:03

5044.【日本滞在記】今朝方の夢

闇に固有の音と瀬戸内海に固有の音が静かに耳に届けられる。いや、その音を受け取っている私は、それを耳だけで受け取っているのではなく、全身を通じて受け取っている。音というのは全身あるいは全存在を通じて聞かれるものだということがわかる。

日の出まで後一時間ほどだろうか。今の気温は15度ほどであり、日本も随分と秋めいてきた。オランダの気温の方が確かに低いのだが、オランダに戻ってからも、それほど苦勞なく日蘭の気温差に適応できそうだという予感がある。

明々後日の今頃は、オランダの家で目覚めている頃だろうか。オランダでの新たな生活がとても楽しみである。

予期していた通り、今回の一時期帰国を通じて、自分の人生はまた新たな方向に動き出した。しかも、その方向性は肯定的なものであり、その動きは力強く着実だ。それを切望していたわけではなく、来るべくしてそれがやってきた。人生の歩行運動とはそのようになされるものなのだ。

明鏡止水の心持ちの中、今朝方の夢について思い出す。自分の心が穏やかな水面のようであれば、認識の光は水面に反射して、鏡のように自己の内奥を映し出してくれる。

夢の中で私は、小中学校時代の何人かの友人と、それ以降に付き合いのあった何人かの友人と一緒に、ソフトボールで全国大会の出場を目指すことになった。最初私たちは、お互いの進路の都合上、全国を目指して激しい練習に取り組むかどうかを迷っていたのだが、いざ全国を目指すを決めたときに、チームは一つになった。

もちろん、メンバーの全員が全国を目指す練習に励むようになったわけではなく、各人の都合によって、チームから抜け出る者も何人かいた。私は大学進学を考えており、夏から秋にかけて週に5日間、朝から晩まで練習するのは厳しいかと思っただが、ここで何か一つのことに打ち込むことをしなければ、一生何に対しても打ち込むことなどできないと思った。また、友人たちと一丸になって練習に励み、全国大会に出場したいという強い思いが湧き上がっていたため、私はみんなと一緒に激しい練習に取り組む決意をした。私たちのチームの監督兼コーチは、小学校6年生のときにお世話になった先生だった。

私たちは先生に、これから本格的な練習に取り組む旨を伝えた。すると先生は笑みを浮かべ、先生も気合いが入ったらしく、早速これから練習しようということになった。その日から私たちは、チーム一丸となって激しい練習を毎日続け、結果として全国大会に出場することになった。その達成感たるや凄まじいものがあった。そして何より、一つの物事に打ち込む尊さを学び、それがもたらす感動の渦に浸っている自分がいたのを覚えている。今朝はその他にも夢を見ていたが、その他の夢についてはもう覚えていない。実家を出発する明日の朝はどのような夢を見るのだろうか。山口県光市:2019/10/15(火)05:19

5045.【日本滞在記】実家を出発する日:今朝方の夢

時刻は午前7時を迎えた。今日の瀬戸内海もとても穏やかであり、朝日に照らされたその姿は美しい。神々しい朝日の光が部屋の中に差し込んでいる。

つい先ほど、父が作ってくれた野菜・果物ジュースを飲み終え、再び自室に戻ってきた。今日はいよいよ実家を出発する日である。いつもは午前中に実家を出発し、いつも宿泊するホテル日航成田には夕方に到着するようにしていたのだが、今回は昼過ぎに実家を出発しようと思う。午前中は完全に実家でゆっくりと時間を過ごし、13時過ぎに実家を出発する。

最寄りの光駅から徳山駅まで列車に乗り、徳山駅から品川駅にかけて新幹線を利用し、そこから成田空港までは成田エクスプレスを利用する。新幹線も随分速くなったもので、徳山から品川までは4時間ほどで行けてしまう。私が幼少の頃はもっと時間がかかっていたように思う。

成田空港に到着したら、ホテル日航成田までは送迎バスが出ているのでそれに乗り、8時半か9時頃にホテルに到着するであろうから、ホテルに到着したらすぐに浴槽に浸ってリラックスし、そのまま就寝に向かうことになるだろう。そうすれば、明日の朝も今日と同じく4時半か5時に起床できるだろう。

明日のフライトは午前中の便ではあるが、それほど早い時間ではないため、ホテルでリラックスし、準備が整ってから空港に向かう。そして、空港に到着してからはラウンジを利用して搭乗を待つ。本当にいつもと同じ流れだ。しかしいつもと少しばかり違うとすれば、自分の心の持ち様や在り様にあると言えるかもしれない。繰り返しになるが、今回の一時帰国を通じて、自分がまた新たな変容を経験し、異なる自己として存在していることに気づくことができた。それは確かな変容であり、成熟に向けた確かな一歩であった。

穏やかな波の音、そして小鳥たちのさえずりが聞こえてくる。今日は平日なのだが、実家の周辺は本当に落ち着いている。普段私が暮らすフローニンゲンの街と同じぐらいの、いやそれ以上の落ち着きがここにある。そうした落ち着きの中で、今朝方の夢を少し振り返りたい。夢の中で私は、京都の街を散策していた。何人かの女性に同行する形で、一緒に京都の歴史的な建造物などを見て回っていた。それらの女性の大半は日本人であり、中に一人か二人ほど外国人がいたように思う。

時刻が昼時を迎えたので、私たちは京都の街のあるレストランに入った。本当は日本的な食堂に入った方が趣があったのかもしれないが、私以外の人たちはそのようなことを気にしておらず、レストランに颯爽と入っていった。

レストランの中に入ると、そこには開放的な空間が広がっていた。ちょうど空いているテーブルがあったのでそちらに向かってみると、隣のテーブル席に著名なピアニストの女性らしき人がいた。ところがその方に近寄ってみると、彼女は目が見えないことを知った。何やら目を閉じたまま、聞こえてくる音に耳を澄ませ、その音楽を空想の世界の中のピアノで演奏するような仕草をし始めた。私

はそれを見て、幾分打たれるものがあった。ところがその方は、隣にいるもう少し若い男性に対して、幾分品のない言葉遣いをしており、その点が私を少々落胆させた。今朝方はそのような夢を見ていた。それでは、今から早朝の作曲実践に取り掛かろう。山口県光市:2019/10/16(水)07:16

5046.【日本滞在記】先輩との偶然の再会:寄せては返す波と人生

一つの波がやって来て、それが去り、また一つの新たな波がやって来る。波は、やって来て、それが去らなければ次の波がやってこない。あるいは、来るからこそ去れる、去るからこそやって来る。私たちの人生もそのようなものなのかもしれない。新たな一日もそうだ。思い出もまたそうだ。

今私は、東京に向けた新幹線の中にいる。3週間に及ぶ長い一時帰国もいよいよ終焉に向かっていく。これは一つの終焉であることに間違いないが、それは新たな波なのだ。この点はもう繰り返す必要もないかもしれない。

寄せては返す波のような人生。自分の呼吸も血液も、瀬戸内海の波のように穏やかに寄せては返すを繰り返す。私は波だったのだ。自己は波だったのである。だから私は海に惹かれるのだ。

波としての自己。そして、自己としての波。

今乗車中の新幹線は品川に向かっている。実家から目と鼻の先にある光駅に早く到着し、そこで新幹線の切符を求めた。窓口に行くと、係員の人一人だけいて、私が窓口近づくと、穏やかな声で挨拶をしてくれた。その声はどこか懐かしい声だった。よくよく顔と名札をみると、中学校時代のバスケ部の先輩ではないか。

私:「あれっ、XX先輩ですか？」

先輩:「ああ、やっぱり加藤君か」

先輩は笑顔でそのように述べた。私はバスケ部時代、よく一学年上の練習に混ぜてもらっており、その先輩は当時から優しく、今もその優しさは変わっていなかった。すぐに私は先輩だと分かった

のだが、切符を受け取るまでは乗客を装い、切符の受け取りの際に先輩に改めて声をかけたのである。

光駅から成田空港第2ビルに行く人など滅多にいないためか、先輩は手元にある分厚い時刻表のようなものを開き、念のため最終駅の名前が正しいかを確認し、手際よく切符の手配をしてくれた。徳山駅に停まるのぞみを選び、徳山から品川までグリーン車を手配した。先輩は気を利かせてくださり、エスカレーター近くの車両と席も出口にできるだけ近い場所を確保してくださった。

先輩:「それではお気をつけて」

私:「先輩もお元気で」

そんなやり取りが窓口であった。光駅から徳山駅に向かう列車を待っている間中、どこか穏やかな幸福感の波に包まれていた。

新幹線は広島を出発し、岡山に向かっている。先輩に手配してもらった席に腰掛けながら、窓の外をぼんやりと眺めている。

次に日本に帰って来るのは一年後だろうか。本当に、本当にあと何回日本に帰ってこれるのだろうか。残りの人生を考えると、日本に帰る回数はいもう限られていることに気づく。日本に一時帰国することも波のようであるならば、この波が寄せては返すことを永遠に続けてほしいと願う。山口県光市:
2019/10/16(水) 14:29

5047.【日本滞在記】成田に向かう車中で思うこと

今、品川を出発した成田エクスプレスの中にいる。実家の光駅に勤務している中学校時代の先輩と偶然に遭遇し、先輩が新幹線にせよ、成田エクスプレスにせよ、出口や乗り換え口に近い席を確保してくれたことに感謝している。先輩の気遣いのおかげで、本当に快適な列車の旅が実現されている。徳山から品川までの4時間ほどの列車の旅はあっという間であった。その間には、作曲実践に没頭し、読書に没頭していた。作曲に関しては、2曲ほど曲を作った。

今日は早朝の5時に起床し、そこから午後3時までの間に6曲作った。スーツケースの荷造りも本日の午前中に行ったことを考慮すると、意外と作曲りに没頭できていたのだと知る。何よりも、曲を作れるだけの十分な時間と精神的なゆとりがあったことを有り難く思わなければならない。

いよいよ作曲が日記の執筆と同様のものになりつつある。それを希求してから2年ほど経ち、それが実現されつつあることを嬉しく思う。もうそれは実現されたと現在完了形にしてしまってもいいかもしれない。これからは、自分がこの人生におけるある瞬間に感じた感覚や感動を、自由自在に曲の形にできるように精進していこう。

その実現に何年の時を要しても全く持つて構わない。とにかくそれを実現させる。何にもましてそれを優先させる。そのような思いを持ち続けていれば、作曲が日記のごとき実践になったのと同じように、祈りに似たその願いは必ず成就するだろう。

実家のある山口県光市の長閑さと、東京の死骸化された光景のギャップが激しい。数時間前までは、私はまだ実家の最寄駅である光駅にいて、そのプラットフォームで正午の光を浴びながら秋風と海風に吹かれていた。トンビが大空を舞い、羽を大きく広げながら優雅に飛ぶ姿は見事であった。

電車に乗り、電車にカタコト揺られながら、新幹線の停車駅に着いたのは、まだほんの数時間前のことだったのだ。そこから数時間後、私は品川駅に降り立った。交通機関が効率化され、移動がより快適になったのは喜ばしいことなのか、嘆かわしいことなのかわからない。数時間で長閑な世界から猥雑な世界に瞬間移動してしまったかのようだ。このあたりの適応はもう慣れた。それもまた幸か不幸かわからない。そうした適応能力を涵養することになったのは、私がこの物質効率化を推し進める現代社会に生きており、世界の様々な場所を移動しているからだろう。

それにしても、品川駅のプラットフォームに待つ人たちの死んだ目つきが気になる。成田エクスプレスが到着する反対側のプラットフォームに先に到着した列車の中を見ると、時刻は午後6時頃であり、会社員たちの帰宅の時間と重なっていたためか、列車がかなり混雑している様子だった。先日友人から聞いた話なのだが、満員電車に乗ることは、戦場の最前線に身を置くのと同じぐらいの

ストレスがかかるらしい。それは誇張でもなんでもなく、はたから見ていると、本当にそれはそうだと思うし、実際に過去に満員電車に乗ったことのある経験からもうなづける。

大都市に生きる人たちはなぜこうも、自らを痛めつけるのだろうか。精神的にも身体的にもなぜこうも自傷的なのだろうか。自らの有限の生命を擦り減らす多くの人たちの姿がそこにあった。そうした光景を目の当たりにした時の自分の感情や感覚を的確に表す日本語は見当たらない。だがそれを曲の形にならできそうな気がする。成田空港第2ビルに向かう成田エクスプレスの中:2019/10/16
(水)18:50

5048.【日本滞在記】収縮拡散運動の真っ只中で:本当の作曲家

この世界のどこにいても何をしていても、文章を書き、曲を作る。今回の日本一時帰国中にもそうしたあり方で日々を過ごしていた。それは決して強迫的なものではなく、とても自然なものであった。何かを思いついてから筆を取るのではなく、筆を取れば自ずから思いが生じ、それが言葉の形になっていく。作曲においても全く同じだ。

多くの作曲家はもしかすると、何か表現したいものが先にあると、それが生まれてから曲を書き始めるのかもしれない。だが私は、何か表現したいものが先にあるというよりも、自然と作曲に向かわせる波のような運動に身を委ね、あるいは空を流れる気流のようなものに身を委ね、そうした運動ないしは力の恩恵を受けながら曲を作り始める。そうすると、自ずから音が自分の内側から生まれ始め、それが一つの曲になっていく。

このありふれた日常から美しいものを作っていこう。呼吸をするかのように、自らの呼吸のごとき曲を作っていこう。その積み重ねが、いつか自分なりの生きた歴史、さらには自分独自の美の歴史を刻むものとなっていく。

日々が美であるということ。充実感と幸福感は美に収斂し、美は充実感と幸福感を同心円状に無限に拡散する。その収縮拡散運動の真っ只中に私は絶えずいる。今日も明日もその中にいる。

人生の最後の瞬間までその中にいる。そうした収縮拡散運動の外に出て生きることはもはやない。

新幹線の中では作曲をするのに並行して、小説家の辻邦生と北杜夫の対談が収められた『若き日と文学と』という書籍を読んでいた。その中で辻先生は、「本当の＜小説家＞は＜言葉＞というものを、現実と同じだけの重さで考えうる人間だと思う」ということを述べていた。それを受けて私は、本当の作曲家は音というものを、現実と同じだけの重さで考えられる人間なのかもしれないと思った。つまり、現実よりも音の方が先行して存在していて、人間としての現実には音が作っているというような認識がある人間が本当の作曲家なのかもしれない。

儂く消える音、そしてその儂さゆえに永遠なるものになりうる音を現実と同じだけの重さで捉えることができるだろうか。それは私が真剣に向き合いたい問いの一つである。

今日というありふれた現実世界の中で見たこと、聞いたこと、感じたこと、それらには固有の重みがある。その重みをそっくりそのままに音の形にできているだろうか。

自らの人生に耐えうるだけの重さを持つ音を生み出したい。自分の人生は決して重厚でもなんでもないけれども、命という掛け替えのない重みを少なからず持つ一人の人間として、自分の生を取り巻く現実の重量感を曲の中に体現させたいと強く思う。

あと30分したら成田空港第2ビルに到着する。ホテル日航成田までの送迎バスが来るまで、ぼんやりと夜空を眺めよう。今夜はどのような星が見え、どのような月が見えるだろうか。星や月の向こうに新たな自分が常にいる。成田空港第2ビルに向かう成田エクスプレスの中:2019/10/16(水)19:04

5049.【日本滞在記】日本出発の朝の心境:今朝方の夢

時刻は午前5時を迎えようとしている。今日はいよいよ日本を出発し、オランダに戻る日だ。

今朝は午前4時前に起床し、結局、一時帰国した初日から最後の最後まで10時頃に就寝し、午前4時に起床するという規則正しい生活が実現されていた。オランダに戻ってからも、このリズムで生活を続けていこう。

昨夜は、成田空港近くのホテル日航成田に宿泊したのだが、枕やマットレスに関していえば、やはり実家で使っていたものの方が良質な睡眠を確保してくれることに気づいた。少し前に言及してい

たように、オランダに戻ったら、テンピュールの枕を購入し、トゥルー・スリーパーのマットレスを購入しようかと思う。もうオランダでの生活が長くなることは明らかなのだから、この際にそれらを購入してしまおう。どのような質の睡眠を取るかは、どのような食事を摂るのかと同じぐらいに大事なことから、睡眠にも気を配っていこう。

午前5時前の成田空港近辺はとても静かだ。まだ外は暗く、そして気温はもう秋めいており肌寒い。オランダの方が若干気温が低いけど、朝晩の体感温度はそれほど変わらないのではないかなと思う。

日本に一時帰国する際には、毎回ホテル日航成田にお世話になっており、出発当日の朝の景色も随分と見慣れたものである。いや、景色に見慣れたというよりも、再び欧州の地で生活を始めていくのに際して立ち現れる気持ちが安定したものになったと言えるかもしれない。より厳密には、「安定」というよりも、「平穏」と述べた方がいいかもしれない。

瀬戸内海のように平穏な心が生まれつつある。それは生まれつつあるのか、それともそれを見出しつつあるのか。いずれにせよ、出発当日の朝の心境は、喜びに満ちているわけでも悲壮めいたものでもなく、とにかく穏やかなのだ。明鏡止水のような心持ちというのは、こうした状態のことを指すのかもしれない。

それではこれから、今朝方の夢について簡単に振り返り、いつものように作曲実践をしてからホテルを出発したい。空港のラウンジではゆったりと読書でもしよう。そして機内では少々仕事をし、その合間を縫って作曲に打ち込んで行こう。

今朝方の夢の中で私は、実際に通っていた中学校の教室にいた。次の授業の開始まで、私は周りにいた友人たちとたわいもない話をしながら時間を過ごしていた。すると、隣の教室から、私に助けを求めてくる女性友達がいた。聞くところによると、地理と古文の融合問題の難問に対する回答を板書しなければならず、その答えを教えて欲しいというものだった。

彼女に腕を引っ張られるかのように、有無を言わず私は隣の教室に連れて行かれた。黒板のあるドアから教室に入って黒板を眺めると、そこには日本地図が書かれており、右横に作問者の名前があった。なんと作問者は私だった。道理で彼女が私に助けを求めてくるわけだ、と私は合点した。

自分が問題を作っておきながら、その問題にいざ回答してみようとする、案外難しく、私は一度自分の教室に戻って、回答するのに役立つような資料集を探し始めた。すると、教壇には次の授業の先生がいた。

見るとそこには、個人塾を経営していた友人の父親がいて、「加藤君、申し訳ないが、この数学の問題を解いてくれるか？」とお願いをされた。地理と古文の融合問題にせよ、数学の問題にせよ、どちらも一筋縄ではいかないと思われたが、冷静になってそれぞれの問題に取り組めば、それほど難しいものではないと思った。その瞬間に夢の場面が変わった。ホテル日航成田：2019/10/17

(木)05:09

5050.【日本滞在記】搭乗前の心境

時刻は午前9時半を迎えた。今私は、成田空港第2ターミナルのサクララウンジにいる。2年前にこのラウンジを訪れた時とは内装が様変わりしており、ラウンジがより明るく開放的になった。アムステルダムスキポール空港で愛用しているAspireラウンジも少し前にリノベーションがなされ、サクララウンジと同じぐらいに明るく開放的になった。私がよく利用するラウンジが直近で立て続けにリノベーションされていることを嬉しく思う。

ヘルシンキに向かうフライトの搭乗が開始されるまであと40分ほどとなった。これから10時間ほどかけてヘルシンキに向かう。

こちらの時間では今は朝であり、ここから10時間ほどのフライトでは、基本的に仕事をしたり、作曲をしたりしようかと思う。今朝はホテルで2曲作り、先ほどサクララウンジでも2曲ほど作った。世界のどこにいても日記を綴り、曲を作り続けていくこと。言葉と音に絶えず寄り添いながら日々を生きていくこと。

呼吸を止めることがないように、それらの実践を止めることはない。絶え間なく、途絶えることなく実践を続けていく。それはもはや実践を超え、自分の生命の躍動の痕跡を残すものとなるだろう。魂の躍動の痕跡と言い換えてもいいかもしれない。

成田空港上空に浮かぶ飛行機雲のような痕跡が残っていく。飛行機雲そのものは儂く消えていくものだが、それを目撃した私の記憶は消えない。それは魂に刻印され、なんらかの形となって戻ってくる。そう、それは必ずまた新たな形で帰ってくるものなのだ。

日本に一時帰国することも、日本からオランダに戻ることも、もうそれは近所のスーパーに散歩しに出かけるような感覚になった。今の自分の心は穏やかであり、どこか達観している。日本に戻ってくる恐れもなく、オランダに戻る恐れもない。

自分の内面世界が大空のようにポカリと中空に浮かんでいる感覚。ラウンジに漂うコーヒーの香りや聞こえてくる人々の声と同じように漂いゆく感覚。左に座っている人はフランス人だということに気づくその感覚。

ゆっくりと生きよう。オランダに戻ってからも、今回の一時帰国でさらに深まった平穏な内面宇宙の中で佇むようにして生きよう。

来月はヴェネチアに行こうかどうかを考えている。年末年始のマルタ共和国への旅行を考えると、今はまだヴェネチア旅行を決定してはいないのだが、自分をヴェネチアに向かわせる何かがあるのだから、何も考えずそれに従ってみるのもいいだろう。

縁に感謝し、縁を最大限に活かさせてもらおう。縁も私たちと同じで生きているのだ。その生命を活かそう。

縁の命を活かそう。そうすれば、私の魂はさらに生き活きとするだろう。

「行けるときに行っておいで」そんな声が自分の内側から聞こえてくる。来月の今頃にヴェネチアに行ってみようか。サクララウンジ@成田空港第2ターミナル:2019/10/17(木)09:52

5051.【日本滞在記】流れ星が夜空と出会う感覚の中で

—人は各種各様の旅をして、結局、自分の持っていたものだけを持って帰る—ゲーテ

果たして今は日本時間で何時なのだろうか。果たして今はオランダ時間で何時なのだろうか。それらは調べればわかる。だがそれを調べることを私はしない。外面的な時間の感覚が消失し、自分の内側の時間感覚が冴えてくるこの感覚。自分の内的な感覚に従順になり、純粹になっていく感覚を大切にしよう。

寝たければ寝ればいいし、食べたければ食べればいい。言葉を紡ぎ出したければ紡ぎ出せばいい。曲を作りたければ曲を作ればいい。そう、そのようにして自分の自分だけの時間が過ぎていく。それが人間としての自分固有の時間に彩られた生だと言えないだろうか。

混乱もなく、平穏な心持ちで今回の一時帰国が終わった。始まりも終わりも、終始一貫して、今回の旅は平穏で縁取られ、また彩られたものだった。平穏さの持つ多様さに息を呑み、それに対して恍惚感を覚えるような時間の中で今回の日本滞在を過ごしていた。母国を離れ、母国でもう2度と生活をしないと決めた者の悲愴さは雲散霧消し、旅人を包む清々しい気持ちがそこにあった。

前回日本に一時帰国した際、私の自己の内奥には、まだなんともし難い切ない気持ちがあった。それは切なさか、悲愴さか。もっといい日本語はないのだろうか。そうした日本語が見当たらないようなので、機内の窓の外にヒントを求めてみよう。

今、ヘルシンキに向かう機内の中において、あと7時間ほどでヘルシンキに到着する。昨日まで山口県の光市において、その日の夜には成田において、今はこうしてヘルシンキに向かう飛行機の中にいる。そしてそこから私は今日中にアムステルダムに行き、フローニンゲンに帰る。

この広く小さな地球という惑星の中を、縦横無尽に小股で歩いて行く感覚。大股ではなく小股で歩くこの感覚。ただし、それはとことんまでに自由であり、とことんまでに縦横無尽だ。

そうかもしれない。前回日本に一時帰国した際に感じていたあの感覚は、夜空を駆け巡るはずの流れ星が、一人流れることができず目的地を失っている感覚だったと言えるかもしれない。いや、これもまたあの感覚の最奥には届かない。より素直に表現すれば、流れぬ流れ星が自己を包む夜空を眺めているその感覚だったのだ。これだ。これが正しい。

今回の一時帰国で得られた感覚は、流れ星が夜空を流れ、夜空と一体となった感覚に等しい。ところで、流れ星とは、ある星がその命を終えたことを示すものであることを忘れてはいやしないだろうか。それを思い出すとなお一層のこと、今の自分の感覚はそれでいいのだと思う。自分は流れ星であり、夜空だったのだ。それは新たな流れ星になり、明日の朝には晴れ渡る空になる。ヘルシンキに向かう機内の中:2019/10/17(木)14:13

5052.【日本滞在記】変容を確認させてくれた3週間の日本滞在

ヘルシンキに向かう飛行機は順調に運行を続けており、あと2時間半ほどでヘルシンキに到着する。今はどの国の上空にいるのだろうか。機内の個人モニターを使えばそれを確認することができるが、推測するにロシア上空あたりだろうか。

先ほどふと、今回の3週間の日本滞在期間中に、自分の中で何かが確かに変わった感覚があった。あるいは、変化はすでに起きていて、その変化に自覚的になった感覚とでも言えるだろうか。

今回の日本滞在は、積み積み積もった小さな変化の末に実現された変容を確認するためにあったのだろうか。旅というのは変化を促したり、自己を涵養するのみならず、変容の確認すらも引き起こすものなのかもしれない。

以前にも言及しているが、私は旅を好んでも嫌ってもいない。そうした感情を超えて、何かが自分を旅に向かわせるから旅に出かけて行くだけなのだ。その何かというのはひょっとすると、さらに先にいる自己であったり、自己を超えた存在なのかもしれない。それらからのいざないによって旅に出かけているだけなのだ。それは幾分受動的に思えるかもしれないが、そうでもない。受動的でも積極的でもないから超越的なのである。

旅が超越的なものであるからこそ、変容が起こるのだ。変容を求めて積極的に旅に出かけて行くなどというのは馬鹿げている。変容は天邪鬼なのだ。そのような形でいくら旅を積み重ねても変容など起こらない。変容は蜃気楼の如く遠ざかって行く。

積極的に旅に出かけ、変容を求める者に見えるのは変容の蜃気楼であって、真正の変容ではない。変容体験というのは、何か驚愕するような体験でもなく、感動的なものでもない。思わず「ぷっ」

と吹き出してしまいそうな体験なのだ。そうした微笑が起こらないのであれば、それは変容ではない。

時計を見ると、ヘルシンキまであと2時間ほどとなった。ヘルシンキ空港に到着したら、すぐにパスポートコントロールに向かう。この空港は乗り換え時間が短く、実に効率的に仕事が進められることで有名である。とは言え、乗り換え時間が短いことには注意が必要であり、速やかにパスポートコントロールを抜きたい。時間的にあまりゆとりはないが、うまくいけばラウンジで30分弱ほどゆっくりできるかもしれない。それが可能であれば、ミネラルウォーターを補給し、果物とサラダ類を少々食べたいと思う。

旅がゆっくりと終わりに近づいているのを実感する。魂の安住地の一つであるフローニンゲンに到着するまであと少しだ。ヘルシンキに向かう機内の中:2019/10/17(木) 18:52

5053.【日本滞在記】ヘルシンキ上空での閃き:来年の秋は札幌・函館・金沢へ

たった今、ヘルシンキ空港からアムステルダムに向けた飛行機が離陸した。成田からヘルシンキに到着した時の気温はなんと4度であり、アムステルダムは随分冷え込んできた。ところが、思い出してみると、3週間前にヘルシンキを経由して成田に向かった時のヘルシンキの気温はすでに1度であり、日本がまだ30度近くの気温に達していたことを思うと、思わず笑みがこぼれてしまっていたことを懐かしく思い出す。

先ほど、成田を出発してヘルシンキに到着したとき、予定よりも15分ほど遅く到着し、ヘルシンキでの乗り継ぎが30分ほどしかなかったため、そこからセキュリティーチェックを抜けて、パスポートコントロールを速やかに抜けられるか少々冷や冷やしていた。ただし、何があっても達観した心境はこの世界のどこにいても変わらず、その冷や冷やした気持ちも大したものではなかった。

実は、ヘルシンキのセキュリティーチェックとパスポートコントロールは実に効率的な仕組みになっていると思っていたこともまた、焦る気持ちを過度に生み出すことを防いでいたのだと思う。というよりもむしろ私は、搭乗時間の前にラウンジでサラダと果物類がどうしても食べたかったため、搭乗時間の焦りよりも、ラウンジに立ち寄れるかどうかの方が気になっていた。結果として、ヘルシンキに到着した時、幸か不幸か、アムステルダム行きの飛行機も遅延しており、幸いにもラウンジでくつろぐ

ことができた。ラウンジでの滞在時間は短かったが、フィンランド名物の暖かい野菜スープとサラダ類を食べた。それに加えて、今日は珍しく、雑穀パンを少々食べた。

フローニンゲン駅に到着するのは午後の9時頃になるため、今日の夕食はヘルシンキのラウンジで済ませたいと思っていたのである。成田からヘルシンキに到着する際の遅延があったが、ヘルシンキからアムステルダムへの遅延のおかげでラウンジで簡単な夕食を済ませることができて幸運であった。

先ほどJALの機内で試聴したドキュメンタリー番組が印象に残っている。それは高野山を特集したものである。高野山の伝統技術(宮大工や法具など)や伝統的な和菓子などが特集されており、偶然にも今回大阪で仕事をご一緒させていただいた協働者の方から、来年は高野山に前泊してから仕事をしようという話になっていたことを思い出した。高野山ともきっと何か縁がありそうだ。来年は高野山に訪れる機会に恵まれれば幸いだ。

また先ほど、飛行機が離陸した瞬間に、来年はヘルシンキから札幌に行き—直行便があるようだ—、札幌と函館を観光した後に石川県の金沢に行ってみようかと思った。もちろん何の計画もなく、ひよんな思いつきなのだが、それらの場所に足を運んでみたいと突如思った。

今年は珍しく、色々買い物をする必要があったため、東京に立ち寄ったが、来年は特に買い物をする予定もないため、東京に立ち寄る必要はないだろう。そうなってくると、来年の秋に一時帰国する際には、アムステルダムからフィンランドを経由するのであれば、まずは北海道に足を運んでみようと思う。これまで北海道とは縁がなかったが、フィンランドの空で思わぬ閃きが生まれ、それが実際の縁に結実してくれればと思う。アムステルダムに向かう機内の中:2019/10/17(木)23:14(日本時間)

5054. 世界の適当さを歓迎して

世界はほどほどに適当だから良い。ユトレヒト駅のプラットフォームでそんなことをふと思った。ようやく私はフローニンゲン行きの列車に乗り込んだ。今日は成田からヘルシンキまでのフライトが遅れ、

ヘルシンキからアムステルダムまでのフライトも出発が遅れた。そしてなんと、スキポール空港からフローニンゲンまでの列車が急遽ことごとくキャンセルになるという事態に見舞われたのである。

大抵の人はこの状況を踏んだり蹴ったりだと表現するかもしれないが、私はむしろ逆に、この世界の適当さに一安心した。確かに世界はますます機械化が進んでいるのだが、こうして様々な予想不可能な遅延が生じることを私は嬉しく思ったし、多いに歓迎した。とはいえ、スキポール空港からフローニンゲンに向かう列車がことごとくキャンセルになっているのを見た瞬間は、「どうやってフローニンゲンに戻る？」と自問した。

今朝もまた午前4時に起き、機内では20分ぐらいの睡眠を何回か取っただけであり、今は日本時間で午前3時だから随分と起きていることになる。眠気の峠を越えたのだが、さすがに通常の状態ほど頭が働かない中で、なんとか機転を利かせ、スキポール空港からユトレヒトに行き、そこからフローニンゲンに一本で行ける列車に乗ることにした。

最初私は、面倒なのでアムステルダムで急遽ホテルに宿泊し、翌日の朝に帰ろうかと考えたが、一刻も早くフローニンゲンの自宅でくつろぎたいという思いが自ずから生まれた。私が帰るべき場所はフローニンゲンであり、最も落ち着けるのはフローニンゲンの自宅なのだ。

ユトレヒトの夜は肌寒く、大抵のオランダ人はもうコートを羽織っている。私は銀座で購入したセーター一枚だったが、これを購入しておいて正解だった。

思わぬ形でユトレヒトの駅に降りた時、その空気が旨く感じられた。オランダの空気を味わう自分。オランダの夜空を味わう自分がそこにいた。いかなる状況に置かれても、このような心のゆとりを忘れたくはない。こうしたゆとりがありさえすれば、世界との関係性を変えることができる。それは巡り巡って自分を変えることにもつながり、自分の人生がより豊かなものに変化して行くことにもつながる。

今、列車の中で顔を上げると、若い女性が英語の書籍を熱心に読んでいた。タイトルを見ると、「コカインマフィア」という英語が表記されており、実にオランダらしいと思った。あの書籍にはどのようなことが書かれているのだろうか。そこには固有の文字世界があり、その文字世界に浸っているその

女性と私が住んでいるオランダには、固有の文化世界が広がっている。それは自ら直接体験してみないと見えない世界である。

直接体験。そう、その大切さを改めて知ったのは、スキポール空港駅で機転を利かせ、ユトレヒトに向かうという意思決定をした時だ。

以前にも何度かユトレヒトを訪れており、フローニンゲンからユトレヒトまで一本で行けることを知っていたのだ。この直接体験がなければ、私は今頃まだスキポール空港で右往左往していたかもしれない。Google Mapで検索などするよりも早く意思決定を行なった自分を見るにつけ、これまで積み重ねてきた直接体験の重要性を知る。

フローニンゲンまであと1時間半ほど列車に揺られ、そこから20分ほど歩いて自宅まで戻る。今日は少し遅くなったとしても、浴槽に浸かってゆっくりし、その後に就寝したいと思う。フローニンゲンに向かう列車の中:2019/10/18(金)03:04(日本時間)

5055. 魂の始動

フローニンゲンに無事に戻ってきてから一夜が明けた。3週間に及ぶ日本滞在が静かに終わりを告げ、今はまだその余韻の中にいる。今回の一時帰国を通じて考えさせられたことや感じたことについては、また追々日記に書き留めておきたい。

昨夜は、スキポール空港からフローニンゲン行きの列車がまさかのキャンセルであり、ユトレヒトを経由して何とか自宅に帰ってきた頃にはすでに夜の10時であった。そこからゆっくりと浴槽に浸かり、11時に就寝した。日本に滞在中は、基本的に午前4時に起床していたのだが、今朝は午前8時まで寝ていた。本当につい先ほどまで寝ていたことになる。目覚めてみると、そこには見慣れた景色があった。寝室の天井や窓から見える景色は大変懐かしく、大きな安堵感を私にもたらした。

3週間もフローニンゲンから離れていると、窓の外の世界はすっかり秋らしくなっている。何よりも紅葉が進んでいる。オランダの国色であるオレンジ色の世界が今広がり始めている。この瞬間の私は書斎の中において、書斎の窓から外を眺めている。いつの間にか裸になってしまった街路樹や、オレンジ色を帯び始めた街路樹をぼんやりと眺めている。

目の前に広がっている景色は本当に美しく、自己の深層を落ち着かせてくれる。こうした景色をぼんやりと眺めていると、心の深層部分に波など立ちようがない。自ずから、明鏡止水の心持ちになっていく。

今回の日本滞在で体得したゆとりを、オランダで始まる新たな生活でも持っていきこう。とにかくゆとりと歩みを前に進めていきこう。

一日の間に何度もぼんやりと窓の外の世界を眺める時間を設けよう。最初は意識的にそれを行い、慣れてくれば、日本で無意識的に行なっていたように、それは習慣化されるだろう。

ふと視線を赤レンガの家々の方に向けると、何やら屋根を工事している。よくよく見ると、ソーラーパネルを取り付けようとしていることがわかる。

午前9時を迎えたばかりだが、工事現場から「カンカン」と高鳴る音が聞こえてくる。その音は天に向かって伸びて行く。高鳴る音が自分の内側にもある。その音を育み、その音が天に上っていくように願ってやまない。

それでは今日も早速、早朝の作曲実践をして、午後あたりから荷ほどきを始め、夕方には買い物に出かけたいと思う。街の中心部の市場に行ってシイタケを購入し、オーガニックスーパーで味噌、豆腐、アーモンドペーストを購入する。その足で近所のスーパーに立ち寄り、オーガニックのバナナとリンゴ、そしてピーナッツペーストを購入しようと思う。

今の私の心はとても穏やかなのだが、静かな興奮がある。魂が次の場所に向けて、いや次の姿に向けて躍動し始めている。魂の興奮がここにある。フローニンゲン:2019/10/18(金)09:11

5056. 魂の安息地としてのフローニンゲン:今朝方の夢

ここが自分の活動拠点であり、ここが魂の安息地であるという感覚。それが今の自分を包んでいる。圧倒的に独りにしてくれるこの素晴らしき環境。自己と向き合うことを自然と後押ししてくれる環境がここにある。

昨夜自宅に帰ってきたときに、自宅周辺の静けさに改めて感銘を受けた。自分の部屋に入った瞬間に、初めてこの部屋にやってきた3年前と同じような感覚に包まれていた。部屋に入ると、そこには静けさだけがあった。その静けさはえらく黙想的であり、意識が自己の内側に向かっていくことを促す。しかもそれは強引な形での促しではなく、とことんまでに自然なのだ。

実家のバルコニーの目の前に広がるあの穏やかな瀬戸内海の景色には敵わないかもしれないが、書斎の窓から外の景色を眺めると、素晴らしい眺めがここにもある。オランダ上空に広がる空が見えて、街路樹や赤レンガの家々が見える。こうした景観を眺めながら、私はまたオランダでの新しい生活を淡々と進めていく。心は明鏡止水の有り様でいて、生活は水の如く淡々と進めていく。日々の淡々とした営みの中に、絶対的な充実感と幸福感がある。

これから作曲実践を始める前に、今朝方に見た印象的な夢について振り返っておきたい。夢の中で私は、両親と一緒に美術館を巡っていた。その美術館は、おそらくヨーロッパ諸国のどこかのものだろう。ただし、館内には日本人だけがいた。その美術館はワンフロアで構成されていたのだが、そのワンフロアがかなり広かった。

最初私たちは一緒に絵画作品を鑑賞していた。その際に、私たちは絵からどのようなことを汲み取ったのかをお互いに話し合っていた。そういう形で家族一緒になって芸術作品を楽しんでいた。すると、私はある一枚の絵の前でふと立ち止まった。その絵はとても大きなキャンバスに描かれており、私の内側の何かを驚掴みにしていた。

その場で身動きができないほどに私はその絵に関心を示し、絵全体を眺めたり、細部を凝視したりしていた。その絵には、エジプトの絵画の中によく出てくるような、爬虫類の頭を持った人間が描かれていた。体の部分は赤く、頭は黒であった。その人間の体の左右が見事な対称性を持っているような気がしたので、私は父にその点を指摘し、なぜそのような対称性になっているのかを質問した。父もその点に気づいていたようであるが、なぜ対称性を持っているのかについてはわからないとのことであった。

そこからしばらく私はその絵画の前で足を止めていた。その後、この美術館にあまり長居ができないと父が述べたので、そこからは少し早足で作品を見ていった。

フロアの部屋の分岐点に差し掛かったとき、左側には現代アートの展示があり、右側には古典的なアートの展示があった。両親は現代アートの方に向かっていこうとしており、私は古典的なアートに関心があったので、そこで私たちは別れた。

古典的なアートが展示されている部屋に一步足を踏み入れた瞬間、そこは旅行代理店の中であり、きらびやかな旅行案内のパンフレットが陳列されていた。ヨーロッパの美しい街並みや、澄み渡る海がパンフレットの表紙に使われており、それらは一様に日本人客に向けたパンフレットであった。私はその旅行代理店の中を通り抜けるようにして過ぎ去り、隣の部屋に行くと、そこもまた旅行代理店であった。そこには20代の半ばぐらいの若い女性がいて、携帯でお客か誰かと話をしている最中であった。特に旅行代理店に用事のなかった私は、その部屋も足早に通過していき、隣の部屋に移ると、そこで夢の場面が変わった。フローニンゲン:2019/10/18(金)09:42

5057. 生の歓喜:魂が天に帰る夢

バッハのフーガと前奏曲が交互に書斎に流れ、その音楽に耳を傾けていると、突然晴れ間が見えてきた。その瞬間に、思わず感動の涙が込み上げてきた。

生の歓喜！それは生の歓喜であった。

爆発！3週間前の自分は生の歓喜によって爆発し、散らばった自己の破片は歓喜が去った後の余韻的流れに浄化されていった。その後に残った私は、3週間前の自分ではもはやなかった。

冷たい風が吹き始めたフローニンゲン。昨夜フローニンゲン中央駅に降り立ったとき、いやユトレヒト駅に降り立ったときに感じていたのだが、オランダはもうすっかり秋が深まっている。ヘルシンキほどの寒さはないが、それでも人々はコートや羽織り、暖かい格好をしている。そんな中、私はまだ日本の気候に影響を受ける形で長袖しか着ていなかった。

今日は曇りの予報であり、午後からは少々小雨が降るようだ。今、地上に太陽光が降り注いでおり、その光の美しさは見事である。その光の筋を眺めていると、実家の目の前の瀬戸内海に煌く太陽の光を思い出した。ダイヤモンドよりも美しい光が、海面を煌めいていた。その光景を思い出すだけ

で、恍惚感を覚える。こんな現代社会だが、本当に、この世界に生を受けて幸運であったと思う。瀬戸内海の素晴らしい光景、そして今この瞬間に見える朝日の輝きを拝むことができるのだから。

先ほど今朝方の夢を振り返っていたが、実はまだ続きがある。起床して2時間が経ったが、後半の夢についても書き留めておきたい。

夢の中で私は、小中高時代から付き合いのある友人(SN)とある著名な書道家の先生(TS)と一緒に街を歩いていた。その街は日本の城下町であり、大変趣があった。しばらく道を歩いていると、二人は突然消えてしまい、私独りになった。すると、私の存在も消え、意識だけが夢を眺める状態になった。

すると突然時代が遡り、天安門橋事件の時代にまで時が巻き戻った。夢を眺めている意識としての自分は、それを「天安門橋事件」だと思っていたのだが、実際には日露戦争中の「柳条湖事件」か、「満州事変」が正しい。

夢を眺める意識としての自分は、薄暗いトンネルを眺めていた。そのトンネルには何人かの日本兵がいて、相手国を攻撃するためにトンネル内に爆薬を仕掛けているところだった。ある一人の兵士が丁寧に爆薬を仕掛けていたところ、少し年上の別の兵士が彼に声をかけ、彼の仕事ぶりをねぎらっていた。それを受けた若い兵士は照れ笑いを浮かべ、より一層仕事に精を出し始めた。

しばらくすると、爆薬を仕掛ける仕事が全て完了した。だが、何かの手違いで、突然一つの爆薬が爆発をしてしまった。不幸にも、先ほどの若い兵士はその近くにいたため、爆発に巻き込まれてしまい、瀕死状態になった。そこに先ほど彼をねぎらっていた先輩の兵士が駆けつけ、彼に声をかけ、応急処置をしてなんとか彼の命を救おうとし始めた。だが、それはもう手遅れのようなようだった。

瀕死の状態の若い兵士は最後に、「あ、ありがとうございます…」と述べた。すると、先輩の兵士は目に涙を浮かべ、自らの手を腕ごと若い兵士の口に突っ込んだ。すると、その腕を通して、若い兵士の魂が天高く上昇していった。白く輝く煙のような魂が天に上昇していく過程を私はただただ眺めていた。そこで私は突然目を覚まして、ベッドの上でその夢についてぼんやりと回想していた。人間の魂を心の眼で捉えることができ、魂はこの地上での役目を終えるとあのように天に帰っていくのだろうか。フローニンゲン:2019/10/18(金) 10:28

魂がくつろぎ、魂が微笑んでいる。そんな感覚がする。

昨夜オランダに戻ってきたが、今のところ時差ボケはさほどない。欧州から日本に行く際の方が時差ボケがあるように思われる。とはいえ、時差ボケの影響が全くないかというところでもなく、やはり体内リズムが少々狂っている感じがする。それがまさに今朝は8時まで寝ていたことに現れている。

午前中、せっかく晴れていたのに、体内リズムを元に戻すために、軽くジョギングをしながら街の中心部の市場に向かった。その足取りのなんと軽かったことか。身体に羽が生え、心に羽が生えたかのように、私の身も心も軽かった。そして何より、フローニンゲンで再び生活を始めることに大きな安堵感を覚えている自分がいたのである。

どこであっていい。この世界のどこであっていいのだが、私たちは、自分が本当に落ち着ける場所で生活を営んでいく必要があるように思う。人や社会が素晴らしいと言ったからではなく、自分自身の心と体に聞いてみるのである。「どこで暮らすのが自分が最も幸せと感じられるのだろうか？」と。そのように問うてみよう。自分の心と体はなんと答えるだろうか。その結果として大都市が選ばれても問題なく、自然が選ばれても問題ない。問題なのは、この物質資本主義的な宣伝に踊らされた形で居住地を選ぶことである。その結果として選ばれば場所では、幸せなど感じようがない。感じられる幸せはまやかしのものである。

紅葉した落ち葉を眺め、赤レンガの家々の前を軽くジョギングしている私は、そのようなことを考えていた。自分の心と体が最も落ち着き、最も生き生きする場所、それがフローニンゲンという街である。これから時間をかけて、私はまたこの世界の様々な場所に足を運んでみようと思う。当面はヨーロッパが中心となるだろう。オランダは永住地の一つになったことは間違いない。これはもう覆しようのないことである。

天気予報の通り、買い物から帰ってきてしばらくすると、激しい雨が降った。それは枯れかかった街路樹の葉を地面に落とすには十分であった。天から降ってくる雨を眺めていると、少しばかり恍惚的な気持ちになった。恍惚感。それは今日の午前中にもあった。不謹慎な表現で言えば、向精神

性の薬物を使用した後の感覚、別の表現で言えば宇宙から帰還した感覚があった。その感覚を持ったのは、雲間から朝日が地上に降りてきて、その光が地上を駆け抜けて、この世界が光の絵筆で撫でられるような光景を目撃した瞬間であった。

天から降り注ぐ光が絵筆であったことを知っていただろうか。あまりにも美しく、あまりにも恍惚的なその光に、私の目は溶けてしまいそうだった。身も心も全てが溶けてしまいそうだった。実際に私の存在は溶けてしまい、感涙がこぼれてきた。そして私は笑った。笑いながら泣き、泣きながら笑った。こんな笑いがあり、こんな涙があるのであれば、私はまだ生きたいと思った。そして、今生きていることに感謝の念を持ち、祈りを捧げたくなった。

先ほど近所のスーパーで購入したオーガニックのジャガイモとサツマイモが揺れながら笑っているように思える。彼らの存在さらには生命は輝いており、地上に降り注ぐ光と呼応している。それを眺めている私もまた、絶対的な至福さと呼応している。フローニンゲン:2019/10/18(金) 14:08

5059. 闇の深さと味わい深さ

闇の深さと味わい深さよ。そんなことを早朝の4時半に思う。

オランダに戻ってきてからの二日目が静かに産声を上げた。人生のある一日が産声を上げたのだが、辺りはとことんまで静寂である。絶対的な無音世界が外に広がっていて、どこか宇宙空間に放り出されたかのような感覚になる。私はこうした環境を望んでいるのだから、それを有り難く思わなければならない。それにいずれにせよ、もうしばらくしたら人々が活動を始め、外の世界に音という彩りがもたらされるのだから。あるいは、こうした無音世界にさえ色が存在するとみなせば、その色を是非とも知覚しよう。

日本に一時帰国して変化したことの一つは、こうした無音世界をより楽しめるようになったことかと思う。これまでの私は、起床してオイルプリングやヨガを行い、書斎に到着するや否や、ピアノ曲をパソコンからかけていた。しかし、日本に一時帰国中にそれをするのをやめてみたところ、朝の静寂さを味わうことの方がより自分を落ち着かせてくれることに気づいたのである。また日中も、できるだけ音楽をかけないようにし始めたことも大きな変化の一つである。これまでは本当に、一日に15時間ほどクラシック音楽をかけっぱなしにして、音に包まれているような生活を送っていた。これからは食生

活上の断食や情報の断食のみならず、音の断食も行っていこうかと思う。それによって、音に対する自分の感覚が今よりも鋭敏なものとなり、音に対する感性が磨かれていくのではないかと思う。

昨日、浴槽に浸かっている時や夕食を食べている時にピアノ曲を聞くことをやめてみると、浴槽に浸かることや食べることそのものが瞑想実践に変わったように思った。意識的に音楽を断ち、無の状態に近い形で浴槽に浸かってみると、脳のみならず、心身がより深い休息状態に入っていた。また食事に関しても、夕食の際に音楽をかけずに、食卓の窓からぼんやりと外を眺めてみると、それそのものが瞑想実践のようであり、さらには深い休息がもたらされていることに気づいた。

昨夜の夕食時には、時折目をつぶってみることをしてみた。すると、視覚優位な状態から、味覚と嗅覚が優位な状態になり、食べ物の味やそれを受け取る自分の心に変化が生じたように思ったのである。今日もまた、ただ食べることに集中することや、ただ浴槽に浸かることを大切にしたい。

今書斎の窓から見える闇は深く、それでいて圧倒的な静けさを持っている。実家に滞在していた時には、闇の世界の向こうから平穏な瀬戸内海の波の音が聞こえていたが、今は何も聞こえてこない。擬似的な宇宙空間のようなこの環境の中で、今日も静寂さを味わいながら自らの取り組みを進めていこうと思う。フローニンゲン:2019/10/19(土)04:42

5060. 優しい居住空間と食育:船舶での旅に思いを馳せて

時刻は午前5時を迎えようとしているが、相変わらず辺りは闇と静寂さに包まれている。この時間帯に活動している人間は、自分だけなのではないかという錯覚が起きてしまいそうな静かさがある。

先ほど小麦若葉ドリンクを飲み終えそうになった時、ヘルシンキからアムステルダムに向かう機内の中で読んだ機内誌の記事について思い出した。そこでは、尖った部分のない木でできた優しい居住空間を持つ家が特集されていた。

居住空間の中に角張った部分がないというのは大変面白く、居住空間がどのような形を持っているかによって、それは私たちの心身に必ずや何かしらの影響を及ぼす。よく、「あの人は刺々(とげと

げ)しい」や「あの人は丸くて穏やかである」という言葉を聞くように、形と私たちの心や身体は密接なつながりがあるのだろう。

今後生活する家の居住空間の形について思いを馳せ、今の家の形に意識を向けている。現在住んでいる家も、幸いにもそれほど尖った部分はないのだが、そうした箇所にも丸みを持たせるような何かしらの工夫をしてみると良いかもしれない。

それともう一つ別の特集記事についても思い出していた。それは何かというと、親が子供に食べ物の選び方と食べ方を見せることの大切さを紹介している記事だった。特集されている人物はフィンランド人であり、両親共に食に対する意識が高く、どのような食べ物が私たちの心身の健康にとって良いのか、またそうした食べ物をどのように食べるのが理想なのかについて子供たちに教えていくことは、親の大切な役割の一つであると述べていた。まさに親から子供に対してなされる食育は極めて重要である。その記事を読みながら、今後は食に関する教育格差もより顕在化していくのではないかと考えていた。今もすでにそれは現れ始めている。

親が子供に食育を施そうにも、親が食に関するリテラシーを持っていないのであれば、そうした食育は実現されない。機内誌を眺めながら、親と子供に対する食育について何か自分にできることはないかと考えていた。その領域で自分がしたいことは何かないかとぼんやりと考えていた。

やはり日本からオランダに戻ってくる際には、それほど疲れもなく、時差ボケの調整に苦勞することも無い。地球をどちら側に移動するかによって、このような違いが生まれることは興味深い。日本からオランダに戻ってくるのがそれほど大変ではなかったとはいえ、やはり長距離移動には負担が付きものである。正直なところ、日本に一時帰国するには随分と体力がいる。

自宅から空港への時間と距離を短くすること、5時間を越すようなフライトはできるだけビジネスクラスに乗ること、目的の空港に到着したら、そこからまた長い移動をするのではなく、空港近くのホテルに一泊すること、そうしたことを今後は徹底させていく必要があるかもしれない。端的には、以前から薄々気づいていたが、日本に一時帰国するのは命を縮めたり、下手をすると死を招く可能性すらあると改めて考えていた。事実、私の敬愛するイスラエル人のある画家の方は、85歳ぐらいの時

に日本に足を運び、日本から戻ってきた時に病気を患ってしまい、その後お亡くなりになられてしまった。

人間は元々空を長時間飛ぶように作られた生き物ではなく、長時間のフライトで無理をしてしまうと、免疫力などが下がり、病気を患ってしまうリスクが上がり、それが最悪命を落としてしまうことにもつながりかねないのだろう。そこでふと、釣り好きの父が先日述べていたことを思い出した。父は近々二級小型船舶操縦士免許を取得し、今後は一級小型船舶操縦士免許を取得しようと考えているようだった。この免許については、実は小さい頃からよく話を聞いていたのだが、今回の一時帰国の時にも話題に挙がっていたため、とりわけ印象強く記憶に残っている。

二級小型船舶操縦士免許は、岸から5海里(9260メートル)まで航行が可能なのだが、それは内洋に限られる。だが、一級小型船舶免許は遠洋区域の外洋まで航行が可能であり——二級の免許がいらず、いきなり一級を取得することも可能であり、試験がそれほど難しくないとのことである——、この免許を持って小型船を取得すれば、飛行機に乗らずしてゆっくりと旅をすることができるのではないかと改めて思った。このアイデアは以前からあり、先月か先々月にふとフローニンゲンにある船の販売会社の前で立ち止まり、ガラス窓に貼られた船の広告を眺めていた際にも似たようなことを考えていた。

ゆとりを日々の生活の中だけではなく、こうした移動においても実現させたい。海賊が出没しそうな海域や荒れやすい海域を避けながら、いつか日本に船で戻ることを夢見ている自分がある。フローニンゲン:2019/10/19(土)05:26